走り読み文学探訪リバイバル(その22)

「わたしと小鳥とすずと」　著者　金子みすゞ

JULA出版局(1,200円，1992年)

紹介者：榎本博康

［紹介］

わたしと小鳥とすずと

わたしが両手をひろげても、
　（中略）
とべる小鳥はわたしのように、
地面をはやく走れない。
　（中略）
すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

萩往還250kmコース図の一部
（本書の著作権については通常の著作権法とは異なる主張があるとのことで、表紙の掲載は控えました。

［感想］

小学校3年生の息子（1999年当時）の、先生の手作り教材の表紙がこの詩の最後の言葉、「みんなちがって、みんないい」だった。中身はクラス全員の名前が書かれており、それぞれの良い個性を記入するようになっている。息子にはこれは大変に難しい課題で、悩んでいた。十年前は知る人の少なかったみすゞは、既に誰でも知っている国民的な詩人になってしまった。

これは童謡詩人、金子みすゞの最も有名な詩のひとつだ。みすゞの詩には一切の偏見がない。すべての命を、その命なりの尊さで受け止めるている。すべてが平等だとは言わない。違っていて、それがいいのだ。

小鳥が小鳥らしいのは飛んでいるときだ。鈴が鈴らしいのはちろちろ鳴っているときだ。ではわたしがはやく走るとは、どういうことだろうか。お空に対する地面はみすゞが現実に生きている世界だ。その自分の世界を精一杯、早く走るように生きている誇りが感じられる。まだ若いみすゞにとって、それは光のように早く走っても尽きることのない、無限の可能性を秘めた世界だ。自分の世界を走る私を私は尊いと思うし、他の人もそんな私を尊重して欲しいと、凛として言っている。私ってすてきね、とだけ言ったら、高慢ないやみや、幼稚な自尊心になりかねないが、みすゞは他のものの個性を尊重することで、さらりと私ってすてきねと言っている。だからあなたもすてきだと。

今年(1999年)が金子みすゞの七十回忌となるので、山口県の仙崎駅を中心としたみすゞの故郷へ電車に乗って遊びに行こうと、ＪＲ西日本の宣伝パンフレットが「西日本再発見」「北長門観光キャンペーン」の文字と共に、ここ広島県呉市[1]の駅にも置かれている。

---

[1]　執筆当時の赴任先

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

本名金子テルは明治36年(1903年)4月に仙崎に生まれた。2歳上の兄と、2歳下の弟がいたが、父はテルが3歳の時に清国で死去。金子家は仙崎で書店を営むが、弟は下関の書店、上山家の養子に。テルは大正5年、13歳で大津高等女学校に入学し、すぐに校友誌に投稿を始める。そして母ミチは上山の後妻になり、下関へ。

大正12年、20歳のテルは、兄が結婚したこともあり、下関の実母のもとに移り住む。そしてペンネーム「みすゞ」を用いるようになり、盛んに投稿を始める。すぐに西条八十に認められ、「若い童謡詩人の中の巨星」といわれたという。

大正15年、23歳で結婚。下関の書店で新婚生活に。すぐに長女ふさえを得る。昭和2年夏、テル発病。夫にうつされた性病と聞く。昭和3年、夫より一切の詩作と手紙を禁じられる。以降発表作なし。

昭和4年、秋に3冊の遺稿集を清書。西条八十と弟に託す。昭和5年(1930年)2月27日、正式離婚。3月9日、写真館で写真を撮り、翌10日書店内で自殺。享年満26歳。

毎年5月に開催される萩往還250キロメートル走のコースは仙崎も通る。142キロ地点で仙崎のＴ字路を左折して青海島(おうみじま)に向かうが、この道の左手に平行した道が、みすゞ通りと名づけられている。しかし私はむしろ、その数キロ手前で湾の向こうに青海島が見えるあたりでいつもみすゞを思い出す。最近までみすゞの晩年が下関だと知らなかったので、この海を見ながら、みすゞ晩年の絶望を想っていたのだ。きらきらとした陽光の中で見る風景は、総ての良いものを集めたもののようである。その中での絶望を思っていたのだ。疲れて走れなくて歩いていると、地面を早く走れないわたしとなってしまったみすゞを思ってしまうのだった。疲れていると、ひどくセンチメンタルになる。

わずかに伝えられたみすゞの詩に心を揺さぶられた童謡詩人、矢崎節夫氏の執念により、死後50年以上経った1982年にぼろぼろになった遺稿集が発見される。「美しい町」(172編)、「空のかあさま」(178編)、「さみしい王女」(162編)合計512編。巻末の手記には、「かわいい詩集ができました。でもちっとも嬉しくない。明日からは何を書けばいいのでしょうか。さびしい。」という意味のことが書かれています。

(初稿1999.7.20)

[リバイバル感想]

萩往還マラニックは250km（制限時間48時間）、140km（24時間）、70km(12時間)と歩け歩け35kmの部から成る、5月のゴールデンウィークを利用した大会であった。どうも2018年の第30回までで終了したらしい。これは走友でもあった小野幹夫氏が地元山口県の魅力を伝えたいと、地元の各自治体と何度となく交渉して作り上げた、山口県の魅力が満載のゴールデンコースである。同じところを通らないループコースなので、その運営の難しさは想像以上だ。次が250kmコースの概要である。

山口市（瑠璃光寺）スタート～小郡町～美東町～秋芳町～美祢市～豊田町～油谷町（川尻岬、俵島）～日置町（千畳敷）～長門市（青海島）～三隅町～萩市（笠山、東光寺）～川上村～旭村（萩往還）～山口市（瑠璃光寺）ゴール

私は20世紀末頃に3回挑戦して完走できなかった。足裏が激しい炎症を起こしたり、底豆ができたりしたのが限界となった。しかし車で仮眠所まで行って寝ると元気が出て、（リタイアはしたものの）続きを走って、結局3回を重ね合わせると全コース

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

を走破していたことになる。だいたい月に100kmを走るかどうかという、マラソン大会出場込みの練習量では体重は絞れてなく、足裏も鍛えられてなく、準備不足としか言いようがないが、今度こそはと準備した年は、申込後に家族の行事が入り、走ることができないままに終わった。当時は練習不足を知恵で克服しようと、持ち物のリストや足裏のテーピング方法、全体を見渡したペース配分など、細かくメモを作成してイメージトレーニングもした。完走にはもう少しだったと思う。仕事がさらに忙しくなったこともあり、そこで私の挑戦は終わった。

ここで私が体験できたことは「限界」である。もう足裏がもたないと、リタイアする時は、本当に限界だと思う。そしてその時の判断は正しかったと思う。恒久的な故障に至る可能性が生じるからだ。なにもかも使い切った感覚は、今思えば快感でさえある。しかしながら数時間休むと、また走れるのだった。ではリタイアしなければ良いではとも思うが、その時は本当にダメだとしか思えないのだ。もう動けないと路側に倒れこんで、空を見上げ、何とも言えない気分になった。そして学んだことは、「限界にも先がある」ということだ。これを知ったことは収穫だったと思う。極端に言えば、命ある限り、何らかの形で挑戦を続けることはできる。

みすゞにもこのように思える瞬間があったらと、悔やまれる。

(2021.1.10)

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.